

# ゴール 新たな10年に向けて

## 土マラソン & フェスティバル

三菱商事 ORBIS ROHTO アミノパリュール アクサダイレクト 復興支援キリン特プロジェクト PASSPORT docomo

まちづくりは、スタートとゴールの繰り返し  
目標というゴールにたどり着けば  
また新たな目標に向けてスタートを切る

登米市もまた、新たな10年に向けて  
夢と希望というゼッケンと  
新たなまちづくりのカタチというシューズを履き  
スタートの合図を待っている  
新たなゴールを目指して



## 新たな10年に向けて新たな一步を

既成の枠にとらわれることなく  
新たな時代をつくっていく  
主役はこのまちに関わる全ての人たち

Last  
**創**  
Create

### Interview 仕掛け人に聞く



東北風土マラソン & フェスティバル副実行委員長  
発起人会代表  
Takashi Takekawa  
竹川隆司さん

**Profile**  
1977年生まれ 神奈川県横浜出身  
国際基督教大学卒業後、野村証券に入社。  
支店営業などを経て、米ハーバードビジ  
ネススクールでMBAを取得し、ロンドン  
法人に赴任。2008年にベンチャー企業経  
営に加わった後、2011年に朝日ネットに  
入社。米子会社を設立し、大学向け授  
業支援システムを提供。2013年に同社を  
退社。現在は、IMPACT Foundation Japan  
で起業家育成プロジェクトを進めている

このイベントは、東北の復興支援を目的に開催しました。平成23年3月11日。当時、ニューヨークで仕事をしていた私も、悲惨な状況が報道され、どこに行っても日本人というだけで心配されました。

そのような中、日本人として自分にできることは何かと考えていました。自分らしさを生かしたいと考え、浮かんできたのがマラソンです。部活で陸上をやっていたわけではなく、健康管理の一環で社会人になってから始めました。趣味のレベルですけどね。

海外赴任中、ボストンやロンドンマラソンなどに出たのですが、中でも一番楽しかったのが、フランスのメドックマラソン。パスタを食べて、ワインを飲んで、仮装して走り、地域の人たちと交流する。競技にはない楽しさを感じました。いつか自分で開催できたらと頭の片隅にあったんですよ。

よそ者の私が登米市を選んだのは、被災3県の中間にあり、沿岸部への中間支援をしていたことと、登米市に縁がある団体とつながりがあったからです。当時、登米市に視察に来て感じたのは、メドックに負けたとしても、のどかな雰囲気、おいしい食事や日本酒、条件は全てそろっていました。即決でした。

開催に当たっては、本来に多くの人、企業や団体に協力いただきました。フルマラソンのノウハウのない私たちと地元の人たちでは到底無理でした。そこで、スポーツメーカーの頼アシックスさんに支援してもらいました。新たなことを始めるときには、外部の力が必要になります。自分たちでできないことは必ずありますから。大手企業だからといってあきらめる必要はありません。しっかりと企画と展望、そして熱意があれば相手も分かってくれます。

また、自分の企画に固執はしませんでした。関係者からの意見をどんどん取り入れました。自分の企画を成功させたいのではなく、目的を達成させたいからです。今年昨年の反省点を踏まえて、イベントや協力を体制などをいくつか見直しています。子どもたちが楽しめるスペースを増やしたり、地元のスタッフを増やしたり。このイベントは何回か開催して終わらせる気はありません。この地のものとして根付かせたいと考えています。登米市を日本のメドックにしたいと思っています。

地域に密着したものにすることは、より地域の人たちに関わってもらわなければなりません。前回、エイドステーションのリーダーは、全員市外から連れて来ましたが、今年には地元の人たちにお願いしました。

昨年、今年と成功で続いた「東北風土マラソン & フェスティバル」。イベント成功の鍵はいくつか上げられます。一つ目は、企画を柔軟に変化させたことです。竹川氏は、自分の企画にこだわることなく、良いものを取り入れました。自分たちができないものは、大手企業の意見や協力なども受けて変化させています。

二つ目は多くの形の「協働」を取り入れたことです。これまで、協働は市民と行政です。これからの意識が変化しました。しかし、今回のイベントでは、市内外問わず多くの人、企業や団体などが有機的に絡み合うスケールの大きな協働の形でした。

私たちもこれまでの枠にとらわれることなく、さまざまなカタチを考えて取り組んでいく必要があるのではないのでしょうか。まちづくりに即効薬はありません。それぞれの地道な努力が未来につながります。合併から10周年を迎えた本市。これからも、活気と魅力にあふれ、夢や希望の持てるまちづくりを目標に進んでいきます。そしてその主役は、登米市に関わる全ての人たちなのです。